



TITLE:

京大広報 No. 554

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 554. 京大広報 2001, 554: 1009-1022

ISSUE DATE:

2001-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196554>

RIGHT:



京大広報

No. 554

2001. 2

目次

大学の動き

- 人権週間に因む教職員研修会の開催.....1010
- 自衛消防団員に感謝状贈呈.....1010
- 平成12年度国立学校施設整備事業の決定.....1010
- 平成13年度入学者選抜学力試験
（第2次学力検査）の期日等.....1011
- 平成13年度入学者選抜学力試験
（第2次学力検査）の志願状況.....1012

部局の動き

- 附属図書館に
「京都古地図コレクション」の寄贈.....1013

医療技術短期大学の動き

- 平成13年医療技術短期大学部
入学者選抜学力試験について.....1014
- 平成12年度厚生補導特別企画
「源氏物語と宇治散策」.....1014

- 日誌.....1015

栄誉

- 医学教育等関係業務功労者の表彰.....1015
- 入谷 明名誉教授，竹市雅俊生命科学研究科
教授が日本学士院会員に選ばれる.....1015

- 訃報.....1017

随想

- 伏見城と液化化 名誉教授 柴田 徹.....1019

洛書

- 犬山のアキザクラ 片山一道.....1020

お知らせ

- 高等教育教授システム開発センター
第7回大学教育改革フォーラム
「大学教員の教育能力をどう開発するか」
.....1021

話題

- 総合博物館で小学生向け科学教室の開催.....1022



京都古地図コレクション
天明新板袖中京繪圖 竹原好兵衛版
（天明六丙午年正月）
関連記事本文1013ページ

大学の動き

人権週間に因む教職員研修会の開催

平成12年12月15日（金）午後3時から、附属図書館（3階）AVホールにおいて、「人権週間に因む研修会」が開催され、渡邊 尚同和・人権問題委員会委員長及び宮崎 昭副学長の開会のあいさつの後、1時間30分にわたり、本学教職員約90人の参加者が熱心に聴講した。

本研修会は、学内外から講師を迎え、本学教職員を対象として同和・人権問題の啓発を図る目的で、毎年、春秋の2回開催している。今回は、竹下義樹弁護士（京都・竹下法律事務所）を講師に迎え、視覚障害者というご自身の体験をまじえながら、「基

本的な人権と夢 - 障害者の生きがい求めて - 」というテーマで講演が行われた。



自衛消防団員に感謝状贈呈

平成12年12月22日（金）午後4時30分から事務局長室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝状及び記念品が大澤幸夫事務局長より贈呈された。

この日感謝状を受けた団員は、目鳥繁行（経理部）、垣田明彦（経済研究所）の両氏である。

なお、当日午後3時から、自衛消防団による演習が行われ、日頃の訓練成果が披露された。



平成12年度国立学校施設整備事業の決定

平成12年度国立学校施設整備事業（第1次補正）のうち、本学関係分は次表のとおりである。

事業名	構造・階	面積	備考
（南部）総合研究棟	S R 5 1	5 510m ²	（凡例） S Rは鉄骨鉄筋コンクリート構造 Rは鉄筋コンクリート構造 5 1は地上5階，地下1階
（共通）全学共通教育棟	R 4 1	3 960m ²	
（南部）総合研究実験棟	R 3 1	1 860m ²	
キャンパス情報ネットワーク	---	---	

平成13年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の期日等

平成13年度入学試験（第2次学力検査）を、次の予定で実施する。

○前期日程試験

月 日	教科等	学 部	時 間
2月25日 (日)	国 語	総合人間「理系」 ・理・医・薬・農	9時30分～11時
		総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済「一般」	9時30分～ 11時30分
	数 学	総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済	13時～15時
		総合人間「理系」 ・理・医・薬・工 ・農	13時～15時30分
2月26日 (月)	外 国 語	総合人間・文・教育・ 法・経済「一般」・理・ 医・薬・工・農	9時30分～ 11時30分
	論 文	経済「論文Ⅰ」	9時30分～ 12時30分
	地理歴史	総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済「一般」	13時～14時30分
	理 科	総合人間「理系」 ・理・医・薬・工 ・農	13時～15時30分
	論 文	経済「論文Ⅱ」	14時～17時

○後期日程試験

月 日	教科等	学 部	時 間
3月13日 (火)	数 学	総合人間・教育・ 経済	9時30分～ 11時30分
		理・医・薬・工(地球 工学科、建築学科 A・B選抜、物理工 学科)・農	9時30分～12時
	論 文	工(電気電子工学 科、工業化学科)	9時30分～ 11時30分
	論 述	工(情報学科)	9時30分～12時
	国 語	総合人間・文・教育・ 経済	13時30分～ 15時30分
		工(建築学科A選抜) 物理のみ	13時30分～15時
	理 科	理・医・薬・工(地球 工学科)・農	13時30分～16時
	論 文	工(物理工学科)	13時30分～16時
3月14日 (水)	実技・論述	工(建築学科B選抜)	13時30分～ 17時30分
	外 国 語	総合人間(独・仏・ 中国語)・文・教育・ 法・経済・医・農	9時30分～ 11時30分
		総合人間(英語)	9時30分～ 11時50分
	面 接	工(物理工学科)	9時30分～ 12時30分 13時～16時30分
		工(工業化学科)	9時30分～12時 13時～18時
		工(建築学科B選抜 電気電子工学科)	13時～17時
		工(建築学科A選抜)	13時～18時
	論 文	文・教育・医・薬	13時～15時
		法	13時～15時30分
	口 述	工(情報学科)	13時～17時

平成13年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の志願状況

志願票の受付は、1月29日(月)から2月6日(火)までの間に、各学部で行われた。

学部別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 部		募集人員 (人)	志願者数 (人)	倍 率	(参 考) 昨 年 度 (最 終)			
					募集人員	志願者数	倍 率	
總 合 人 間 学 部	前 期	110	441	4.0	110	461	4.2	
		文 系	55	234	4.3	55	224	4.1
		理 系	55	207	3.8	55	237	4.3
	後 期	20	372	18.6	20	379	19.0	
文 学 部	前 期	190	567	3.0	190	629	3.3	
	後 期	30	379	12.6	30	412	13.7	
教 育 学 部	前 期	40	160	4.0	40	165	4.1	
	後 期	20	155	7.8	20	168	8.4	
法 学 部	前 期	320	883	2.8	320	838	2.6	
	後 期	40	478	12.0	40	518	13.0	
経 済 学 部	前 期	210	798	3.8	210	897	4.3	
		一 般	160	473	3.0	160	619	3.9
		論 文	50	325	6.5	50	278	5.6
	後 期	30	595	19.8	30	709	23.6	
理 学 部	前 期	271	953	3.5	271	968	3.6	
	後 期	30	1,016	33.9	30	1,062	35.4	
医 学 部	前 期	90	431	4.8	90	481	5.3	
	後 期	10	229	22.9	10	264	26.4	
薬 学 部	前 期	70	212	3.0	70	193	2.8	
	後 期	10	151	15.1	10	133	13.3	
工 学 部	前 期	874	2,396	2.7	874	2,481	2.8	
		後 期	101	1,073	10.6	101	1,335	13.2
	地 球 工 学 科	前 期	175	448	2.6	175	479	2.7
		後 期	20	261	13.1	20	358	17.9
	建 築 学 科	前 期	80	241	3.0	80	238	3.0
		後 期	10	127	12.7	10	122	12.2
		A選抜	5	84	16.8	5	55	11.0
		B選抜	5	43	8.6	5	67	13.4
	物 理 工 学 科	前 期	211	592	2.8	211	640	3.0
		後 期	24	191	8.0	24	410	17.1
	電 気 電 子 工 学 科	前 期	117	328	2.8	117	308	2.6
		後 期	13	136	10.5	13	217	16.7
	情 報 学 科	前 期	81	186	2.3	81	215	2.7
		後 期	9	100	11.1	9	81	9.0
	工 業 化 学 科	前 期	210	601	2.9	210	601	2.9
		後 期	25	258	10.3	25	147	5.9
農 学 部	前 期	240	736	3.1	240	751	3.1	
	後 期	60	799	13.3	60	807	13.5	
合 計			2,766	12,824	4.6	2,766	13,651	4.9
	前 期		2,415	7,577	3.1	2,415	7,864	3.3
	後 期		351	5,247	14.9	351	5,787	16.5

注 法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）の募集人員には、「外国学校出身者のための選考」の募集人員20人（法学部）と10人（経済学部）が、志願者数には40人（法学部）と16人（経済学部）が、それぞれ含まれている。

部局の動き

附属図書館に「京都古地図コレクション」の寄贈

このほど附属図書館では、京都市上京区在住の大塚 隆氏から、「京都古地図コレクション」の寄贈を受けた。寄贈を受けた古地図は、江戸期から近代に至る京都に関する地図の唯一といえる体系的コレクションである。総数は470余枚に及び、そのうち約280枚は江戸期及び明治期前半に作製されたもので、江戸期京都図の版元を代表する林 吉永や竹原好兵衛など主要な版をほとんど網羅している。

コレクションの中には、江戸期に印刷された現存する本邦最古の京都市街図である「みやこのき都記」、通称「寛永平安町古圖」(刊年、版元不明)が含まれている。蔵書印からこれまでに何人かの所有者の手を経たことがわかるが、中にはけんかどう木村兼葭堂や富岡鉄斎の蔵書印も見える。これは重要文化財にも匹敵するものと言われている。

また、同じ版でも手書きで彩色されたもの、彩色印刷されたものがあるなど、比較して見ると興味深い地図がたくさんある。町中を子細に眺めると、正面通りの東詰に大仏があったことが分かるほか、現在に残る通りの名前があり、改めて京都の長い歴史を感じさせる。

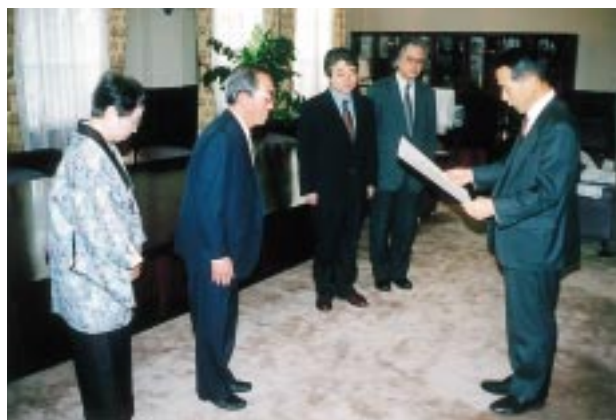
これらは、人文・社会科学分野のみならず、広範囲の研究者にとって第一級の学術研究資料であり、今後の研究者による活用が大いに期待されるところ

である。

このコレクションは、金田章裕文学研究科教授の永年にわたる同コレクションに関する研究を縁として寄贈に至ったものであり、寄贈者の大塚 隆氏に対して、平成12年12月19日(火)総長室において、佐々木丞平附属図書館長、金田文学研究科教授、熊谷俊夫附属図書館事務部長等の出席のもと、長尾真総長から感謝状の贈呈が行われた。

附属図書館ではこの古地図を「大塚京都図コレクション」として貴重図書に指定し、整理・保存していくだけでなく、図録の作成、公開展示会の開催のほか、現在推進している「電子図書館システム」によるネットワーク上でも公開することにより、広く利用していただくことも計画している。

(附属図書館)



医療技術短期大学の動き

平成13年度医療技術短期大学部入学者選抜学力試験について

平成13年度入学試験を、次の予定で実施する。

月 日	教 科	時 間
3月2日(金)	国 語	9時 ~ 10時30分
	数 学	11時 ~ 12時30分
	外 国 語	14時 ~ 15時30分
3月3日(土)	理 科	9時 ~ 11時

なお、1月26日(金)から2月1日(木)まで入学願書の受付が行われた。

学科別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 科	募集 人員	志願 者数	倍率	(参考)昨年度		
				募集人員	志願者数	倍率
看護学科	80	234	2.9	80	282	3.5
衛生技術学科	40	309	7.7	40	282	7.1
理学療法学科	20	231	11.6	20	268	13.4
作業療法学科	20	169	8.5	20	169	8.5
計	160	943	5.9	160	1,001	6.3

平成12年度厚生補導特別企画「源氏物語と宇治散策」

平成12年度の医療技術短期大学部厚生補導特別企画は「源氏物語と宇治散策」と題して、晩秋の一日、宇治の地を訪れた。日時は平成12年12月2日(土)、全参加者は21人であった。

午前9時に医療技術短期大学部正門前をバスにて出発、10時前に「源氏物語ミュージアム」に到着した。入館してまず最初に、ホリヒロシ作の人形を用いた「宇治十帖」の短編映画(篠田正浩監督)を鑑賞した。その後、展示室等の見学を行った。



11時前に館を出て、「さわらびの道」を散策し、世界最古の神社建築である「宇治上神社」、「宇治神社」を経て、紅葉の名所「興聖寺」を訪れた。さらに、宇治川にかかる朝霧橋を渡り、まず「平等院」を拝観。その後、休憩をかねて昼食のための自由時間とした。

午後はまず、市営茶室「対鳳庵」にて和菓子と抹茶を賞味しつつ、茶席の雰囲気を経験した。その後、再びバスに乗って「宇治植物公園」へと向かう。起伏のある公園内を自由に散策しながら見学を行った。バスでの帰路、交通渋滞に巻き込まれることもなく、予定通り午後4時に正門に到着、解散となった。

この特別企画は、学生にとっては学科・学年の枠をこえての相互交流や教職員との親しい交流の機会であり、また、日頃は学業多忙のあまり見過ごされがちな自然の風景や歴史・文化の香りを味わう貴重な機会でもある。本大学部では、今後とも、このような企画の充実をはかる所存である。

(医療技術短期大学部厚生補導委員会)

日誌

2000.12.1 ~ 12.31

12月4日 Aftab SETH インド大使他2名来学，総長及び関係教官と懇談
 5日 評議会
 " 大学院審議会
 6日 組換えDNA実験安全委員会
 11日 中華人民共和国学長団（楊立中 西南交通大学学長他19名）来学，総長及び関係教官と懇談

14日 外国人研究者との懇談会
 " 能楽鑑賞会
 15日 人権週間に因む教職員研修会
 19日 評議会
 20日 国際交流委員会
 26日 放射性同位元素等管理委員会

栄誉

医学教育等関係業務功労者の表彰

新井正紀技官（医学部附属病院准看護師）は，医学に関する患者診療等に係る補助的業務に関して顕著な功労があったことにより，平成12年11月28日（火），文部大臣より，平成12年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けられた。



入谷 明名誉教授，竹市雅俊生命科学研究科教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび，入谷 明名誉教授，竹市雅俊生命科学研究科教授が日本学士院会員に選ばれました。以下に両氏の略歴，業績等を紹介します。

入谷 明名誉教授は，昭和28年京都大学農学部農学科を卒業し，同33年本学農学部助手，同37年講師，同43年助教授を経て，同52年教授に就任，家畜繁殖学講座を担当された。平成4年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は，平成4年から近畿大学教授，同9年には近畿大学生物理工学部長・生物理工学研究所長を歴任され，現在に至っている。この間，



日本胚移植研究会会長，日本不妊学会理事長，国際受精卵移植学会理事，国際家畜繁殖学会副会長などの要職を歴任されている。

入谷名誉教授の最大の業績は，哺乳動物，特にウシ，ブタ，ヤギ等の受精現象を解明され，それを体外で再現しうる実験系（体外受精技術）を確立したことにある。本来，哺乳動物の受精は体内で起こるものであり，それを体外で再現することは困難であった。特に，家畜類における体外受精系の確立は，家畜の増産と改良に寄与するところが大きく，技術確立が待望されていた。

入谷名誉教授はまず、受精が起こる環境（子宮や卵管）の分泌液成分を生化学的に詳細に検討され、動物の発情期に分泌される非透析性・熱感受性たんぱく質が、受精に必要とされる受精能獲得と呼ばれる現象に密接に関連することを明らかにされた。ついで、1977年及び1978年には、ウシとブタ精子を子宮内で一定時間培養することにより、精子の受精能を誘導し、体外で卵子と培養することにより、世界初の体外受精に成功された。近年、家畜の体外受精技術は飛躍的发展を遂げ、畜産領域において極めて重要な技術となっているが、これらはすべて、同名譽教授の研究成果が発端となっている。その後、さらに研究の方向性を発生工学分野に向け、受精能の低い精子を顕微受精と呼ばれる方法により卵子内に注入し、1987年世界に先駆け産子の生産に成功され

た。この手法は、畜産分野に留まらず、医学領域の不妊治療に不可欠な技術として、広く世界中で臨床応用されている。

以上のように、同名譽教授の研究は、哺乳動物の生殖現象にメスを入れ、そのメカニズムを解明するとともに、体外での哺乳動物胚操作技術を開発することによって、近年その発展が目覚ましい生命科学技术の基礎を築いたものとして、国の内外で極めて高く評価されている。

これらの業績に対して、昭和39年家畜繁殖学会賞、同61年西川畜産奨学財団功労賞、平成元年京都新聞文化賞、同7年日本農学賞、世界不妊学会基礎生物学賞、紫綬褒章、同10年日本農業研究所賞、同11年日本学士院賞など多数の賞を授与されている。

（大学院農学研究科）

竹市雅俊教授は、昭和41年名古屋大学理学部生物学科卒業、同44年同大学大学院理学研究科博士課程退学後、同45年京都大学理学部助手となり、同53年同助教授、同61年同教授に就任、平成11年同大学大学院生命科学研究所教授に配置換えとなり、多細胞体構築学講座を担任され、現在に至っている。この間、平成4年から5年間、岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所行動制御部門客員教授、同5年から7年間、京都大学理学部附属分子発生生物学研究センター長を併任、同12年より、理化学研究所発生・再生総合研究センター所長を兼務され、また、現在、日本発生生物学会の会長を務められている。



竹市教授は、長年にわたり、動物細胞の接着・認識機構の研究を行い、この分野において国際的に先導的な役割を果たしている。動物の細胞は互いに接着し多細胞体を構築しているが、細胞どうしの接着のために、2種類の機構（カルシウム依存機構、非カルシウム依存機構）が存在することを見だし、この分野に精密科学としての新しい道を開かれた。次に、それらの機構の分子基盤を研究し、カドヘ

リン接着分子群を発見された。カドヘリンは細胞間の接着のために必須であると同時に、選択的細胞接着にも関与するなど、多細胞体制の形成・維持に極めて重要な役割を果たしており、現在までに、何十種類もの機能が多様化した類似分子が同定されるに至った。さらに、カドヘリンの機能は種々の細胞質因子によって制御されていることを明らかにし、この制御の異常が、がん細胞の分散等を引き起こすことを見だし、基礎科学のみならず医学分野からも多くの注目を集めている。また、カドヘリンは脊椎動物だけでなく無脊椎動物にも存在し、多細胞動物界にとって普遍的な接着分子群であることを明らかにし、最近では、カドヘリンが神経細胞シナプスにも存在することを見だし、シナプス結合の分子機構の解明に糸口を与えることに成功されている。これらの成果は、生命科学の多分野に大きな影響を与え、国内外において高い評価を受けている。

これらの業績に対し、平成元年塚原伸晃賞、同4年中日文化賞、同5年大阪科学賞、同6年朝日賞、同7年高松宮妃癌研究基金学術賞、同8年上原賞、日本学士院賞を授与され、また、平成5年ハーバード大学医学部からダンハム・レクチャーラーとして迎えられている。

（大学院生命科学研究所）

訃報

このたび、鈴木^{すずき}みつ子化学研究所技術専門職員、萩原^{はぎわらじゅんぺい}淳平名誉教授、市川^{いちかわやすお}康夫名誉教授、小林^{こばやし}稔^{みのる}名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

鈴木 みつ子 化学研究所技術専門職員



化学研究所技術専門職員鈴木みつ子氏は、平成12年12月2日逝去された。享年52。

同氏は、昭和52年10月に化学研究所に奉職され、以来23年余りの永きにわたり、研究支援業

務にあたりとともに宇治地区排水モニター業務にも尽力された。

なお、平成7年1月には分析化学、特に液々面ボルタンメトリーとシデロフォアの研究により京都大学博士（理学）の学位を授与されている。

（化学研究所）

萩原 淳平 名誉教授



萩原淳平先生は、平成12年12月17日逝去された。享年80。

先生は、昭和21年京都帝国大学文学部史学科を卒業後、文学部副手、静岡県立臨時教員養成所教授、京都大学文学部助手、同助教授を経て、同53年同教授に就任、東洋史学第二講座を担当された。昭和59年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は立正大学教授に就任、引き続き教育と研究に励まれた。

先生のご専門は東洋史学、とくにモンゴルを中心とする北アジア史及び東アジア史で、なかでも『明代蒙古史』は明代のモンゴル史に関する30年余にわ

たる研究の集大成である。膨大な漢文とモンゴル語の資料を駆使して、明朝とモンゴルとの交渉史を主軸に、それをめぐって展開されたモンゴル社会の動態を究明した本書は、この分野の研究に新たな展開を切り開いたものであった。また、モンゴル帝国・元朝史についても、従来の征服王朝論を見直す論考を多数発表し、特に中国の学者と活発な論争を展開した。さらに、膨大な史料集である『明代満蒙史料』全18冊や、上中下3冊の『元史語彙集成』などの編纂・出版にも中心的役割を担って尽力された。

先生は、東洋史研究会、日本モンゴル学会などの学会においても活躍され、とくにモンゴル人民共和国（現モンゴル国）との共同学術調査の実現に貢献された。

（大学院文学研究科）

市川 康夫 名誉教授



市川康夫先生は、平成12年12月21日逝去された。享年73。

先生は、昭和27年京都大学医学部医学科を卒業、同大学ウイルス研究所助手、助教授、同51年同大学結核胸部疾患研究所教授に就任、同61年辞職により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和61年から平成10年まで京都ノートルダム女子大学教授を務められた。

先生は、がん研究、特に白血病および血液学の研究において優れた業績を残された。試験管内で、未

分化な血液細胞が好中球やマクロファージに分化することを初めて証明され、その後の細胞分化、サイトカインなどの研究の展開に大きな足跡を残された。また、骨髄性白血病細胞株、M1細胞を樹立され、白血病細胞を、ある種の分化誘導因子の存在によって、正常な血液細胞へと分化・脱癌させ得るという画期的な発見をされた。これは「癌の分化誘導療法」という概念を確立するものとなった。退職後に出版された『山なみ遠に - 僕にとって研究とは』（学会出版センター）は、真摯な1人の科学者の心の軌跡として、研究者をめざす若い世代に大きな力を与える貴重な著作である。

（再生医科学研究所）

小林 稔 名誉教授



小林 稔先生は、1月6日逝去された。享年92。

先生は、昭和8年京都帝国大学理学部物理学科を卒業後、大阪帝国大学講師、助教授を経て、同19年京都帝国大学理学部助教授、同20年同教授に就任、物理学第二講座を担当され、物理学科の改組後は原子核論講座を担当された。昭和47年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、教育と研究指導とともに、昭和31年11月から同33年11月、同43年11月から同45年11月まで評議員として、本学の管理運営に貢献された。

先生のご専門は、初期には素粒子・原子核の理論であり、湯川中間子論の発展への貢献及び原子核物

質とベータ崩壊の先駆的研究で優れた業績を挙げられた。1950年代以降は、殻構造の発見による興隆のきざした原子核物理の理論に専門の中心を据えられ、研究と後進の育成によりこの分野の発展に寄与された。加えて『量子力学』『原子核論』の執筆を含む「近代物理学全書」の編著、「物理学叢書」「新物理学シリーズ」の編集、『電気力学』の著作等で物理学の進歩についての紹介、啓発に尽くされた。

先生の多岐にわたる学界への貢献の中でも特筆すべきは、わが国初の共同利用研究所である基礎物理学研究所の設立、欧文誌「*Progress of Theoretical Physics*」の発刊にあたり献身的な尽力をされ、発展の基礎を築かれたことである。

これら一連の功績により、昭和55年4月勲三等旭日中授章を受けられた。

（大学院理学研究科）

随想

伏見城と液状化

名誉教授 柴田 徹



私の散歩コースの一つに、伏見北堀公園がある。自宅を出て乃木神社の前を通り、桃山御陵の鬱蒼とした森を抜けて遊園地の外周道路に沿って歩くと、目的の公園に辿り着く。

北堀公園は東西方向に約800メートルの長さがあり、その中央南側に設けられた階段と付近の道路には、非常に細かいサラサラの白い砂が薄く積もっている。公園にやってくる人達は、おそらくこのような場所にある砂を気にとめることもなかろうが、私にとっては今から10年ほど前にタイムスリップさせてくれる思い出の砂である。

1989年11月。時の総長・西島安則先生から、次のような依頼を受けた。「伏見城北外堀の発掘調査をしている友人がいて、地震噴砂とおぼしき跡がみつかったので、専門家に現地をみてもらえないかと連絡してきた。お願いできないだろうか」と。

当時、勤務先の防災研究所から近いことでもあり、助手の三村 衛君と一緒に現場へ出かけた。そこには発掘調査をされてる伏見城研究会の方々が待ち構えていて、噴砂の地点へ案内して下さった。

噴砂は、地震時に地下水の水圧上昇にともなって、液状化した砂が水と一緒に地層の亀裂をたどって地上に噴き出す現象である。1964年新潟地震のときには、市内の各所でビルの転倒、落橋や大規模な地這りなどの被害を生じ、液状化の怖さに世界中が驚きの声をあげた。その後も液状化に伴う地盤震害を発生させた地震は、国の内外を問わず数多くみられた。1995年の阪神・淡路大震災で、臨海埋立地が受けた液状化被害は、記憶に新しいところである。

この現象は目新しいものでなく、ここで古文書の助けを借りると、「大地裂け、泥水湧出す」とか「潟中に一気に砂山を突出し」などの記録が残されている。また考古学との関わりでみると、遺跡発掘調査

が活発に行われている中で、近年、地震による液状化跡が方々で確認されるようになった。

さて伏見城北外堀の東斜面で発見された噴砂跡は、現在の地表から約1.5メートルの深さを下端として蛇行しながら上方にのび、地震当時の地表面で水平に流れ出した状況をうかがうことができた。噴砂の跡から砂を採取して実験室に持ち帰り、粒度分析の試験をしてもらったところ、液状化の可能性が大きい砂と判明した。つまり条件さえ整えば液状化する砂と判明したが、砂層が液状化して噴砂現象を起こすためには、水をたっぷりと含んでいることが必要条件である。したがって伏見の地名が伏水に由来する点からしても、当該丘陵地に豊富な地下水が蓄えられていた、と私は推論した。

ところで天下統一を果たした豊臣秀吉は、1594年秋、現在の桃山町泰長老の地に伏見城を完成させた。初代伏見城であるが、築後2年にして慶長地震(1596年)のために崩壊した。この地震は加藤清正が地震後に真っ先に秀吉のもとに駆けつけたことから、加藤地震との別名がある。古文書によれば、城内だけで500人以上が死亡したといい、「子の刻大地震、土裂け水湧出す。京都、伏見、巨宅および民家倒れ破れ」とあり、伏見での液状化発生を記録している。上記北堀公園でみつかった噴砂跡も、この地震で生じた可能性が極めて高い。

初代伏見城は大天主、諸門、矢倉など主な建物だけでも15棟以上を備えた城郭であったが、一瞬のうちに壊滅した。その壊滅的な状況は、地盤の液状化がもたらしたのだろうか？ はたまた泥海と化した大手筋通りを、加藤清正が城に向かって懸命に疾走したのだろうか？……私の空想は飛躍して尽きることがない。

因に二代目伏見城は、地震翌日から突貫工事で、現在の桃山御陵の位置に移して造られたという。およそ400年昔のことである。

(しばた とおる 元工学部教授

平成7年退官、専門は地盤工学)

洛書

犬山のアキザクラ

片山 一道

私が所属する霊長類研究所は、愛知県の犬山市にあり、京都大学では最も遠隔にある部局ではなかろうか。

研究所は犬山の街はずれの丘の上にある。敷地内にはチンパンジーをはじめ、各種のサル類の群が野外に放飼されている。それらサル類を窓外に眺める研究室にいと、われわれ人間とサル類の間の生物学的な近さが実感できる。

ここでは、サルたちはわれわれの隣人であり、同時にサルたちにとっては、われわれ人間は動物園の鑑賞動物のごとき存在なのかもしれない。サルたちのほうが建物の外側から中の人間をのぞき、こまかく分かれた部屋（オリ）の中で、あくせくウロウロ、怪しげなことしているのが人間のほうなのだ。

背が高いのも低いのもおり、顔だちはさまざま、頭の毛が黒いのも白いのもいる。そんな人間たちの様子を見ながら、サルたちは何を思っているだろうか。ときどき窓の外を眺めると、そんなサルたちの視線を感じる。

ときに天気の良い日など、研究所を出て、街のほうに降りていくのもよい。ため池があり、川があり、商店街や駅などがあり、だんだんと人間の匂いが強くなっていく。まるで人類の進化の道をたどるよう

な散歩である。身近にいたサルたちの存在が、だんだんと遠のき、私たちがサルたちの仲間であることの実感から遠ざかっていく。

犬山の街の風景もすてたものではない。小さくも見映えのする古城があり、どこでも木々の匂いがする。川には鳥たちが遊び、釣り人が糸をたれている。その川べりには、春は桜が満開、秋は彼岸花が絢爛と咲く。

ここでは秋から初冬にかけても、桜が咲くのだ。ある一画だけだが、この花が肌寒い冬空のもとで咲く光景は、なんとも奇妙である。冬の蚊のようなもので、それほど元気よく咲くわけではないが、なにかしら風情をさそう。

これはアキザクラと呼ぶそうだ。日本語辞典で「秋桜」の項を調べると、コスモスのことと記してある。だが犬山の桜は正真正銘、本物の桜。まだ学名は調べてないが、秋遅き季節に花をつける桜の種類があることは、犬山に来て初めて知った。

ここを本拠とする教官、研究員、大学院生諸氏は、たいていは人間以外のサルのことを研究しているのだが、私を含めた少数の者だけは、人間という名のサルのことを研究している。まるで霊長類研究所のアキザクラのようである。

（かたやま かずみち 霊長類研究所教授）



お知らせ

高等教育教授システム開発センター 第7回大学教育改革フォーラム 「大学教員の教育能力をどう開発するか」

日 時 3月24日(土) 13:00~17:00

場 所 京都大学楽友会館2階講演室(東山近衛東入ル北側・近衛中学校向かい)

従来は、大学、大学の教育、FDを問題にしてきましたが、制度や組織についての議論が中心で、大学の重要な構成員であり、大学における授業実践の主体である大学教員をどう考えたらいいのかについてはあまり議論されてこなかったように思われます。言うまでもなく、評価は目標追求をしている主体に有効な情報をもたらすことを本質とします。したがって、大学の評価を考える前に、大学の教育の主体である教員の教育能力について自覚化する必要があると思います。

今回のフォーラムでは大学教員に焦点を当て、大学教員の教育能力とは何か、その内実をどう考えるか、さらには教育能力をどう開発するかについて、カリキュラム研究、学生による授業評価研究、大学における教育開発研究、大学における授業研究の最前線で活動している諸氏の提案を軸に、参加者全体で考えてみたいと思います。

プログラム

挨拶	総 長 長 尾 真	
問題提起	高等教育教授システム開発センター教授	藤 岡 完 治
提 案	「カリキュラム研究の立場から」	
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科長	安 彦 忠 彦
	「学生による授業評価研究の立場から」	
	慶應義塾大学総合政策学部教授	井 下 理
	「大学における教育開発研究の立場から」	
	北海道大学高等教育機能開発総合センター教授	阿 部 和 厚
	「大学における授業研究の立場から」	
	高等教育教授システム開発センター教授	田 中 每 実
司 会	高等教育教授システム開発センター長	荒 木 光 彦
	高等教育教授システム開発センター教授	藤 岡 完 治

聴 講 料 無 料(申込不要)

定 員 100人(先着順)

問い合わせ先 高等教育教授システム開発センター

TEL 075(753)8087 FAX 075(753)8045

話題

総合博物館で小学生向け科学教室の開催

総合博物館では、従来から市民の皆様に向けて様々な活動を行っています。今年度は、初めての試みとして小学生向けの科学教室を平成12年8月と12月の2回開催し、のべ110人近くの参加がありました。大学ならではの科学教室として、自然史科学の方法論のエッセンスを伝えるため、三葉虫を題材にカリキュラムを用意しました。参加した生徒一人一人が三葉虫の標本をスケッチし、なにげなく描いた点々が、複眼の痕跡であることなどの解説を聞いて、観察の大切さを学びました。また、三葉虫の歩き方をディスカッションし、その後、^{はいあと}這跡の実物化石を見て答えを知り、仮説と検証について学びました。こうして教室の終わる頃には、どの子供の眼もキラキラと輝きを増し、自然史科学の方法論の基礎を楽



しく理解してくれたものと考えられます。総合博物館は小さな組織ですが、今後もこのような行事の開催を通じて「市民に開かれた大学の窓口」としての役割を果たして行きます。

（総合博物館）



三葉虫に眼を輝かせる子供たち